HITOKOMART No.8

小学校４年生の夏、市営プールからの帰り道で乗っていた自転車がふらついて道端の空き地に張られていた鉄条網に突っ込んでしまったことがある。
60年以上過ぎた今もその時の傷痕が左の腕に幾筋も残っている。
当時の男の子にとってはそういう物はちょっとしたケガ自慢の話のタネになるのだが、その日痛みをこらえて家に戻り、母に手当てをしてもらいながら、親から与えてもらった身体に大きな傷をつけてしまった申し訳なさに襲われたのを今も覚えている。

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

見　栄　250×250

肉球焼

A-3

かぐや猫

F-6号

CAT CARTOON

2007年から2年半ほど犬と猫だけを題材にした1コマ漫画のを朝日新聞の大阪版で連載した。

この原画展は連載中に京都大阪、東京の3カ所で開いた後、2冊の作品集にまとめている。

その水彩シリーズとは別にアクリル絵具でキャンバスに描いたものが幾つかある。犬や猫をかわいく描くだけのイラストレーションには全く興味も無いし制作意欲も沸かないのでいつも自分なりの1コマ漫画としてのアイデアを練り込んでいる。

そう考えると犬と猫だけで200点近くの一コマ漫画を描いてきた漫画家はそういないのではと思っている。

ヒラキ

F-6号

縫う

A-2

不確かなモノたちとの対話

家内が59歳で亡くなってもう14年目になる。今は一人暮らしの生活にすっかり慣れてしまったが、時折、誰もいないはずの自宅内で何かの気配を感じることがある。昼間はそういうことは無いが夜中に一階の部屋で寝ていると階段から誰かが降りてくるような気がしたり台所に誰かがいるような気配を感じることもある。

若干の不気味さはあるが恐怖感は無く、自分の背後霊に守られているという感覚がいつもあって、トラブルや危険な場面でも最終的には良い結果になるのはそういうことなのだと思っている。

霊魂や霊界の存在を証明するものはないがその感覚が普段の生活の中で少なからず支えになっている気がするのである。

幽体離脱

A-2

A-1 変形

wave

若い頃、テレビの国会中継を見るのがちょっとした楽しみだった時期がある。政治に関心があるというよりも与野党の議員たちのテレビ中継を意識してのわざとらしい自己アピール発言やパフォーマンス、わざと論点を微妙にずらしてとぼけた答弁を返す閣僚たちの姿を、下手な素人芝居を見ている気分で観察するのである。
当然、昔から議員たちの居眠りは見慣れた風景だったが、あらかじめ提出された質問に閣僚が用意した答弁用の書類を棒読みする舞台には緊張感はなく居眠りに誘われるのも仕方ないなあと思って見ていたものだ。
しかし最近はとんと興味が薄れている。世の中がコロナ中心のせいもあるが、魅力的な政治家が見つからないからだ。一見、熱く夢を語る政治家たちの姿に反射的に裏の部分を感じる事が多くなったからなのだろう。

スポンサー

バブル期のある時期、企業は世の中に提供する文化的な関わりの場にあえて企業名を伏せるというのが進歩的だとされた事があった。自社の名前やロゴをここぞとばかりに目立たせていかにも『金出してまっせ！』と表示する営業方法はダサいという考えだ。
この考え方は多くの共感を得たと思ったが、バブルの崩壊とともにそんな綺麗事はあまり語られなくなった。歴史あるスタジアムや美術館の名前に突然企業名が入り、それが資金難に苦しむ地方自治体を支えているのも複雑な気持ちで眺めている。

F-4号